

心にのこるエピソード

障害者病棟の病棟師長をしていた時のことです。

患者は、50歳代の男性Aさん。肺がんの末期。酸素濃度も低く経過、独居で家族は疎遠であり面会に来る方もなし。日々ラウンドをすると病室の窓から外を見て「外に行きたい、お寺の境内があるところに行きたい」と話されていました。受け持ち看護師からも相談を受け、多職種とともに外出時の安全性を考慮したカンファレンスを何度も行いました。外出の日まで容態の変化の心配がありましたが、念願の外出日になり看護師と介護士とともに酸素ボンベをつけ車椅子で外出することができました。Aさんからは、「ありがとう本当に良かったよ。もうどこにも行くことができないで死んでいくと思っていたから」としみじみと話していました。その数日後、永眠されました。病棟内スタッフ全員で関わることができた症例でした。

幹事長 山杉睦子

起き上がりこぼし（勇気がでた出来事）

起き上がり小法師（おきあがりこぼし）は会津を代表する縁起物で、転んでもすぐに立ち上がるところから、粘り強さと健康のシンボルとして縁起がいいとされています。毎年初市で家族の人数より1個多く買う習わしがあり、会津の家庭には欠かせない縁起物になっています。

看護師になって34年。退院支援という言葉も一般的ではなく、介護保険制度もなかった時代。看護師5年目に会った80歳の独居女性患者は「自宅で暮らしたい」と強く望んだ。彼女は膠原病や老年期精神病、視力低下など複数の障害を抱え、身体障害者2級認定だった。その願いを叶えるため、多職種による地域連携カンファレンスを重ね、ボランティアも巻き込んだ在宅ケアシステムを構築。住み慣れた地域で暮らし続けられた。私はこの経験を通じて、寄り添い支える看護の原点を学んだ。看護師は「大丈夫、必ずまた立ち上がれる」と優しく励まし、患者が再び歩き出す勇気を引き出す存在だ。失敗や苦しみを経ても前向きに在ることで信頼が深まり、より良い看護に繋がると信じている。

上都賀総合病院 山形文子